

『大宝積経』における死生観の研究

－チベット語訳〈優波離所問経〉和訳研究（4）－

中御門 敬 教

はじめに

主要な浄土経典、例えば〈無量寿経〉〈阿閼仏国経〉〈文殊師利仏土巖浄経〉などは、大乘経典の大叢書である『大宝積経』に所収されている。この叢書を中継地としてインドからチベットへ、そして東アジアへと浄土教の死生観は展開していったのである。その意味で『大宝積経』の精査は、浄土教の死生観の研究にも繋がる課題である。そこで、その中から前回に引き続き大乘菩薩戒を扱う〈優波離所問経〉を選び、訳註研究を行う。

今回扱う箇所概要を示せば以下のとおりである。

1. 二乗の立場からの成仏を「声聞乗の増上慢」、「菩薩乗の増上慢」として排斥し、空性による調伏義 (vinaya)こそが、「律の確定版 (Skt. vinaya-viniścaya)」とされ、成仏につながるものと考えられている。大乘における三蔵 (経律論) を考えた場合、内容的には、その「律」に相当するのが本経であり、後のシャーンティデーヴァなど菩薩戒の著作において、何カ所も引用されている。
2. 本経典は、声聞の原理主義と、菩薩の過度の理想化に対する一つの警鐘である。その上で空思想が二乗の間においてバランスとして機能していたことの、一つの例示である。
3. 哲学的に一見矛盾した有と無の対立に関して、中観派の二諦説により適切に理解できるので、後の中観派 (チャンドラキールティ) に好まれて、多く引用されたと考えられる。

凡例

和訳の方針については、中御門〔2016〕〔2017〕〔2018〕に従った。概要を示せば以下のとおりである。

・テキストとして Python〔1973〕を利用して、経典の全体が残っているチベット語訳からの和訳研究を行う。

・ Python〔1973〕が示す「通し番号」に基づき、部分ごとに和訳を行う。その際に私に小見出しを付け、理解の便宜を図る。ただし、通し番号 71-93（偈頌相当）の小見出しについては省略した。

・ 註記にあげたサンスクリットの対応は、Python〔1973〕の掲載分である。

・ Python〔1973〕校訂テキストと、デルゲ版・北京版を比較して読むと、校訂テキストが挙げる読みに、他の読みの可能性が確認できた。その点については注に記述している。

・ 西晋焮煌三蔵（竺法護）訳『仏説決定毘尼經』（『大正蔵』12、宝積部、No.325）、唐菩提流志訳『大宝積経』『優波離会第二十四』（『大正蔵』11、宝積部、No.310-24）と、全体の約四割程度が残っているサンスクリット語原典を適宜参照し、その相違点を注に挙げた。なお〈優波離所問経〉と良く対応する二つの経典、すなわち劉宋求那跋摩訳『菩薩善戒経』序品（『大正蔵』30、中観部全・瑜伽部上、No.1582）と *Bodhisattvapratimokṣasūtra* 第二段については、今後の研究課題とする。

・ 今回扱う範囲は、チベット大蔵経の範囲では P.Zi.127b6-129a8, D.Ca.129b6-131a7、漢訳の竺法護訳の範囲では pp.42a7-c10、菩提流支訳の範囲では pp.518c19-519b16 である。校訂テキスト Python〔1973〕の通し番号 71-94（pp.60-64）である。

〈聖なる律の決措をウパーリが問うたもの〉¹と名付けられた大乘経典

71.

（P.Zi.127b6）（D.Ca.129b6）『〔私は〕衆生の利益、菩提〔を得る〕ために発心する。』といて、

最高の、殊に勝れた〔菩提〕行を教示したとしても、

菩提は決して認得しえなくて、

〔菩提を〕欲する者、彼も〔実体として〕存在しない²。

72.

心は、自性は光り輝き、清浄であり、
塵無く、塵を離れていて、垢は〔実体として〕存在しないとお説きになった。
〔しかし〕凡夫は〔実体として〕存在しないものを分別し、
貪ることになり、瞋^{いか}ることになり、癡に (D.Ca.130a) なる³。

73.

妙なる等至の法を得たならば、
〔実体として〕貪は存在せず、瞋は存在せず、癡も存在しない。
貪を離れ、解脱した法〔、すなわち〕、
アーラヤ (kun gzhi) になっていないもの⁴、涅槃を得る⁵。

74.

(P.Zi.128a) 虚空のようなこれら諸法を知ったならば、
百の諸国土に無碍〔に〕赴くであろうし、
彼らの意も貪りはなくなるので、
それゆえに、無碍の道⁶を生じなさい⁷。

75.

多く百劫において行じて、
百の無辺の衆生を済度しても、
決して衆生は認得しえなくて、
〔実体としては、衆生の苦の〕尽も無いし、無辺となったものも無い⁸。

76.

あたかも幻師が世間において、
多く百の衆生を化作して、
彼ら幻〔の衆生〕すべてを殺したとしても、
彼ら幻〔の衆生〕を殺したことが無いように、⁹

77.

この一切の衆生は幻の自性 (rang bzhin) である。
この〔衆生〕において、辺際は決して認得しえない¹⁰。
そのように無辺際であるのを信解する
彼らは、世間における疲厭がない¹¹。

78.

無自性であるこの法を知る、
彼ら勇者は、世間〔おいて〕涅槃した。
〔五〕妙欲 ('dod pa'i yon tan) を行じても無貪であり、
諸々の貪りを断じたし、衆生を調伏する¹²。

79.

ここにおいて¹³〔実体として〕どんな衆生も無く、命も無いが、
人の王〔すなわち仏陀〕たちは衆生に益 (phan) をなさる¹⁴。
衆生は〔実体として〕無いが、利益 (don) をなさる、
彼らのそれは大きな困難 (dka' ba)¹⁵ である¹⁶。

80.

あたかも酩酊した者が〔拳を〕握って、童子に対して
示して、手〔の中〕¹⁷にあると述べてから、
それにより、酩酊した者が空っぽであると見せてから、
その童子は、涙を流し泣くように、¹⁸

81.

そのように仏は不可思議である。
衆生のさま (tshul) を熟知しており、了知した者たちは、
これら諸法¹⁹が空虚 (gsob)、虚ろ (gsog) だと了知してから、
諸世間における事物の教示を示す²⁰。

82.

この極めて歡喜する教示において、
『在家者の印 (rtags)²¹を捨て、出家して、
〔修行の〕果を有する (D.Ca.130b) 最高の者となりなさい。』と、
悲 (憐れみ) を持つ人は、(P.Zi.128b) そのような教示をもなされた²²。

83.

在家者の印を捨て、出家して、
〔修行の〕あらゆる果を得ることになっても²³、
諸々の法の自性について思量したなら、
〔勝義として、修行の〕すべての果は無く、果を得たことも無い²⁴。

84.

それでもなお、〔世俗としては〕果の得が、得られるだろう。
〔その結果として、〕『ああ、悲 (憐れみ) を持つ最高の人である
勝者は、道理をたいそう良く説かれた。』とあって、
彼ら〔聴衆〕は、大いなる驚異〔の思い〕が生じるであろう²⁵。

85.

そのように、それら〔本来、言語を離れた〕寂靜なる諸法について、
『これらは、〔五〕根、禪定 (静慮)、解脱と
〔五〕力と〔七〕覺支、寂靜〔である。』』とあって、
千ほどの名と句をもって教示なされた²⁶。

86.

どの〔五〕根も生じていない。〔五〕力も〔生が〕無く、
〔七〕覺支、寂靜をも生じさせない。
この法は〔勝義として、〕色を有するもの (gzugs can) でなく、取ること²⁷が
無いが、

諸世間においては、智力によって説かれた²⁸。

87.

諸衆生に対して〔果の〕得を私が説いた
そのすべては、〔それ自体の〕相を捨てたものである。
ここに²⁹〔衆生たちが〕およそ「私が得た。」と思う
彼は、〔本来〕得ていないのを、得たと慢心をなす³⁰。

88.

諸世間において〔実体として〕諸々の事物は無い。
そこで、〔果を〕得たことは何も存在しない。
〔果を〕得ることと得ないことを衆生に教示なさる。
そのように知る者、彼は〔果を〕得たのである³¹。

89.

あらゆるものより秀でた果を得たところの
その衆生、私は〔その〕衆生は〔実体として〕無いと教示した。
そこで、決して衆生を認得することは無い。
衆生が無ければ、誰が〔果を〕得ることになるのであろうか³²。

90.

田地、そこに種子が無い。
その〔田地〕に芽が生ずることは無いように、
そのように、決して衆生を認得することが無いのなら、
〔実体として〕衆生が無いものにおいて、〔果を〕得ることがどこに有るのか³³。

91.

このあらゆる衆生が涅槃して、
ここに決して根本（自性）³⁴を認得することがない。

誰かこの〔ような〕法の方軌を信解した者、
彼を私は、無余依涅槃したと教示した³⁵。

92.

多くの百〔も〕の〔諸〕仏が、まさしく過ぎ (P.Zi.129a) 去った。
彼ら〔諸仏〕によっても、あらゆる衆生は (D.Ca.131a) 調伏されなかった。
もしもいくらか衆生が、この〔世、今世〕に生じていたとしても、
彼ら〔衆生〕は、決して涅槃しないであろう³⁶。

93.

そのようにこの道は障礙が無い。
その〔道〕に決して貪りが無い。
この法性を信解した者たち、
彼らの意は、有³⁷ (生存) を貪らないであろう³⁸。」と。

94. 流通分

世尊が〔これら諸〕偈頌〔、すなわち〕修行を教示するこれを説いたとき³⁹、増上慢を具えた二百の〔諸〕比丘は取なく⁴⁰、諸漏から心は解脱した。六万の〔諸〕菩薩は無生法忍を得た。

それから、世尊に対して具寿ウパーリはこのように申し上げる。

「世尊よ、この法門の名前は何ですか。これをどのように受持いたしましょう。」と。

世尊はこのように宣べられた。

「ウパーリよ、それゆえにあなたは、この法門を『律の決択 (*'Dul ba rnam par gtan la dbab pa*)』というものとして受持しなさい。『すべての心識⁴¹ (*sems can*) を摧破するもの (*Sems can thams cad yang dag par 'joms pa*)』というものとしても受持しなさい。」と。

世尊がそのように宣べられてから、具寿ウパーリと、文殊童子と、彼ら〔諸〕菩薩と、彼ら〔諸〕比丘と、すべてを伴ったその眷属と、天と、人と、アシユラ

(阿修羅) と、ガンダルヴァを含めた〔諸〕世間が歓喜し、世尊がお説きになったことを賞讃した。

【参考文献】

- ・奥住毅『中論注釈書の研究 - チャンドラキールティ『プラサンナパダー』和訳-』(大蔵出版、1988)
- ・梶山雄一訳『論争の超越 (廻廻論)』(『大乘仏典』(『世界の名著』2) 中央公論社、1967)
- ・古角武陸「インド・チベット中観派における縁起説の展開 - ナーガールジュナからチャンキヤ・ロールペードルジェまで-」(『仏教史学研究』59-2、2017)
- ・長尾雅人『撰大乘論 上』(講談社、1999)
- ・中御門敬教「『大宝積経』における死生観の研究 - チベット語訳〈優波離所問経〉和訳研究 (1) -」(『共生文化研究』創刊号、2016)
- ・中御門敬教「『大宝積経』における死生観の研究 - チベット語訳〈優波離所問経〉和訳研究 (2) -」(『共生文化研究』2、2017)
- ・中御門敬教「『大宝積経』における死生観の研究 - チベット語訳〈優波離所問経〉和訳研究 (3) -」(『共生文化研究』3、2018)
- ・藤仲孝司、中御門敬教「〈ウパーリ所問経〉に説かれた「三十五仏悔過」 - イェシエー・ギェルツェン著『菩薩墮罪懺悔註』の和訳と研究-」(『ACTA TIBETICA ET BUDDHICA』4、2011)
- ・Luis de la Vallée Poussin, *Mūlamadyamakārikās*, 名著普及会, 1977
- ・Pierre PYTHON, *Vinaya-Viniścaya-Upāli-Paripṛcchā*, Paris, 1973
- ・Yoshiyasu Yonezawa, *Vigrahavyāvartanī* Sanskrit Transliteration and Tibetan Translation (『成田山仏教研究所紀要』31、2008)

- 1 拙稿〔2016〕〔2017〕〔2018〕では、「聖なる律の決択であるウパーリによる所問」と和訳したが、今回は「聖なる律の決択をウパーリが問うたもの」と修正した。
- 2 竺法護訳：説於諸行最勝者、能為衆生發道心、菩提之道不可得、当知求者亦非実、菩提流支訳：我説發趣菩提心、利益世間最殊勝、而実菩提不可得、亦無發趣菩提者
- 3 竺法護訳：其心本性常清淨、無有染著諸苦惱、凡夫分別諸惡心、自生貪愛諸染著、菩提流支訳：心性清淨常光明、真實無偽無愛染、凡夫分別生貪著、而彼煩惱本来空
- 4 ここの「阿頼耶」は「五取蘊」（五蘊に付随した煩惱）の意味か。その場合、心身を脱した状態であるので、ここの涅槃は無余涅槃の意味となる。唯識派以外の、例えば『阿含経』でも「阿頼耶識」以外の意味で説かれている。詳細は長尾〔1999〕p.118-120を参照のこと。
- 5 竺法護訳：諸法妙勝常寂靜、而実無有愛患痴、法性解脫離染愛、逮到安穩無処所、菩提流支訳：諸法自性常寂靜、何有貪欲及瞋痴、不見生貪離欲處、爾乃名為得涅槃
- 6 「無碍の道」とは、空の証悟に支えられた菩提心と理解すべきか。
- 7 竺法護訳：我知諸法如虛空、遊諸世間不生畏、其意未曾有染著、是故不住於邪道、菩提流支訳：了知諸法如虛空、常処世間無所畏、其心未曾生染著、由是成就大菩提
- 8 竺法護訳：我於多劫修諸行、度脫無辺諸衆生、而諸衆生生不尽、亦未曾有増減時、菩提流支訳：於無數劫修衆行、度脫無量諸衆生、衆生自性不可得、実無衆生可度者
「度脱」、すなわち苦しみの輪廻からの解放を、空性と関係づけた偈頌である。
- 9 竺法護訳：譬如世有大幻師、能化無辺百千衆、即時皆害諸化人、而於幻者無増損、菩提流支訳：譬如世間大幻師、化作無辺千億衆、還復害此諸化人、於此幻化無増損
なお内容的に平行するものとして、ナーガールジュナ『廻諍論』v.23、並びにその『自註』（Cf. Yonezawa〔2008〕pp.256-257, D.no.3828, Tsa.27b5ff.、D.no.3832, Tsa.127aff.）がある。
- （梶山訳：変化が他の変化を妨げ、幻人が自らの魔術によってつくった（他の幻人）を妨げる。それと同じように、この否定もありえよう（二三。）Cf. 梶山〔1967〕p.246
この対応については、古角武陸氏によって御教示頂いた。直後の二十七偈は同様な否定のあり方を、女性に対する錯覚に適用しており、本経の律（調伏）の内容とも一致する。さらに直後には『中論』24, 10の二諦説を引用しており、それも本経の傾向と合致するようである。
- 10 十四無記の内容への言及。「Tib.'gro ba, Skt*gati」とあるので、世界（趣）についても含意されている可能性がある。
- 11 竺法護訳：一切衆生如幻化、求其辺際不可得、若知如是無辺性、斯人処世無疲厭、菩提流支訳：一切衆生如幻相、其辺未曾而可得、若有能觀不思議、当知彼人不厭生
菩提行に対する煩わしさや、重荷に感じない状態を、空性と関係づけた偈頌である。
- 12 「調伏する（dul bar byed）」には「律」が含意されている。
梵：ye parinivṛta loki ta śūrā

yehi 'sabhāvata nāt'imi dharmāḥ
kāmaguṇair hi caranti asaṅgāḥ
saṃga vivarjīya sattva vinenti

(奥住訳：これら諸法を、自性のないものであると知る、かれら勇者は、世間において、すでに般涅槃している者たちである。〔かれらは、〕諸妙欲を行じつつに無著なる者たちである。愛著を捨棄したのちに、〔諸〕有情を教え導くから。) Cf. 奥住〔1988〕p.426,732
なお通し番号78-79の二偈については、以下の『中論註』に引用されている。

Cf. Poussin〔1977〕p.257 (『中論註』cp.14)

二偈のうち通し番号79に限っては、Poussin〔1977〕p.474 (『中論註』cp.23)にも引用されている。

竺法護訳：観世寂靜名勇猛、知(如)法実相亦復然、受五欲利常修行、不生染著度衆生、菩提流志訳：了知諸法如实相、常行生死即涅槃、於諸欲中实無染、調伏衆生言離欲

13 デルゲ版の読み「di na」に従う。

14 三種の慈・悲のうち、第三、無縁の慈・悲という含意か。

15 チベット訳『中論月称釈』に限っては「dga' ba」である。書体の類似による誤表記かと思われる。

16 梵：no 'pi ca sattva na jīv'īha kaści
sattvahitaṃ ca karonti jinendrāḥ
imu duṣkaru teṣa mahāntaṃ
sattvu na asti karonti ca arthaṃ

(奥住訳：ここにおいては、いかなる有情もなく、命我もない。しかしながら、勝者の王たちは、有情の利益をなす。有情が存在しないとしても、〔かれらは、〕利益をなす。〔かれらの目的は、達成されがたい。]) Cf. 奥住〔1988〕pp.426-427

竺法護訳：無有衆生及寿命、世尊憐愍与慈悲、動修精進大苦行、雖無衆生作利益、菩提流志訳：大悲利益諸衆生、而实無人無寿者、不見衆生而利益、当知此事甚為難

17 デルゲ版の読み la に従う。

18 竺法護訳：如以空捲(拳)誘小兒、誑惑其心令染著、然後開手示空捲(拳)、小兒即時大啼哭、菩提流志訳：如以空拳誘小兒、示言有者令歡喜、開手拳空無所見、小兒於此復號啼

19 この「諸法」は文脈より、「慢思の対象」である。

20 D. gdags pa ston, N. P. bstan pa bstan ナルタン版、北京版の読みを採用した。

竺法護訳：如是難思仏世尊、於諸法相淨覺意、已解遠離空無法、而能示現於世間、菩提流志訳：如是諸仏難思議、善巧調伏衆生類、了知法性無所有、假名安立示世間

なおこの偈頌(通し番号81)は「分別による仮設」を説くが、本経では Python〔1973〕p.59に出る偈頌(通し番号69)がその代表といえる(Cf. 拙稿〔2018〕p.89「試訳：種々の、意に喜ばしい花が開いたし、最高の輝いた金の館が意に好ましい。ここには、そこにおいても何ら作者は無い。それらは分別の力によって置かれたのである。』)。

古角 [2017] p.24ff. は、チベット仏教のゲルク派が示す三つの縁起説、すなわち①因果関係一般、②全体が部分より仮設されること、③分別により仮設されることを挙げて、ツォンカバ (1357-1419) による『入中論』の複註『意趣善明』が③の説明を行う際に、当経が重要な教証とされていることを指摘している。

21 対応する竺法護訳には「捨離俗服能出家」とある。ここの「俗服」とは、在家人が着る「白い衣服」のこと。転じて在家者のことを「白衣」と呼ぶ。

22 梵：iha sāsāṇi sūramaṇīye
pravrajathā gṛhīṅga jahitva
phalavantu bhaviṣyatha seṭṭhā
eṣu nideṣitu kārūṇikena

(奥住訳：このきわめて喜ぶべき教誡において、在家のしるしを捨てて出家せよ。あなたは、果を具有している最勝者となるであろう。悲愍を有する者は、つぎのように教示している。) Cf. 奥住 [1988] p.265,632

なお通し番号 82-84 の三偈については、以下の『中論註』に引用されている。

Cf. Poussin [1977] pp.155,408-409 (『中論註』 cp.7,20)

竺法護訳：於我法中甚可樂、捨離俗服能出家、其後當得最勝果、大慈悲人之所說、菩提流志訳：以大慈悲勸説言、於我法中最安樂、汝応出家捨恩愛、當得沙門殊勝果

23 単一の道ではなく、三乗が想定されていると考えた。

24 梵：pavrajīyā gṛhīṅga jahitvā
sarvaphalasya bhaviṣyati prāptiḥ
puna dharmasabhāva tulitvā
sarvaphalā na phalā na ca prāptiḥ

(奥住訳：在家者のしるしを捨てて出家するならば、一切の果が、得られるであろう。さらに進んで、法の自性を秤量するならば、一切の果も無く、〈果に到達すること〉も無い。)

Cf. 奥住 [1988] p.265,632

竺法護訳：已能出家捨俗務、復聞當得速諸果、觀察諸法真實相、無有諸果而可得、菩提流志訳：既已出家勤修習、如所修行得涅槃、復觀諸法如實相、實無諸果而可得

25 梵：alabhanta phalaṃ tatha prāptiṃ
āścariyaṃ puna jāyati teṣāṃ
āhu 'tikāruṇiko narasiṃho
suṣṭhupadeṣita yukti jinena

(奥住訳：果と、また〔果への〕到達が得られていないときには、かれらにおいて、さらに進んで、大驚異が生ずる、『ああ、人中の獅子なる大悲愍者よ。勝者は、よく確立されている道理を説示された』と。)

Cf. 奥住 [1988] p.265,632

竺法護訳：已於諸法無得果、轉復生於未曾有、快哉大悲人師子、善入相應諸法相、菩提流志訳：果無所有而得証、於此方生希有心、快哉大悲人師子、善説相應如實法

- 26 竺法護訳：一切諸法如虚空、能立名百千万、此名為根禪解脫、亦名為力七覺支、菩提流志訳：一切諸法如虚空、安立百千名句義、或説名為禪解脫、或名根力或菩提
ちなみに『俱舍論』では法門の数を八万四千ともいう。
- 27 D.P.gzung, N.gzugs 漢訳よりデルゲ、北京版の読みを採用した。
- 28 竺法護訳：諸根無有生滅相、覺力等法亦復然、非是色性不可取、以智力現示世間、菩提流志訳：而此根力本無生、禪定菩提亦非有、無色無形不可取、但以方便示衆生
- 29 D.P.na, N.ni ナルタン版の読みを採用した。
- 30 第49段の「増上慢」への言及と関連する。「相を捨てた」ものはそこでの「不可思議なもの」に相当するだろう。いわゆる四種声聞のうち増上慢の声聞の内容である。
竺法護訳：我說衆生有所得、皆是遠離諸性相、若有計我有所得、不名為得沙門果、菩提流志訳：我說修行有所証、當知遠離一切相、若謂於中有所得、是則非証沙門果
- 31 竺法護訳：若法無生亦無滅、誰有於中而得者、説衆生得即無得、能覺此法名為得、菩提流志訳：諸法自性無所有、當於何処言得証、所説得証為無得、如是了知乃名得
- 32 竺法護訳：衆生得果名最勝、我說衆生非衆生、未曾有得衆生者、是故不應有得果、菩提流志訳：衆生得果名殊勝、我說衆生本不生、尚無衆生而可得、如何當有得果者
- 33 竺法護訳：譬如良田無種子、彼中不應而生芽、如是衆生不可得、云何當有逮寂靜、菩提流志訳：譬如良田無種子、於中終不有芽（芽）生、如是衆生不可得、當於何所而言証
- 34 これは因または自性と考えられるが、直前の田地の種子、芽の喩例からは、植物の根に喩えていると思われる。
- 35 竺法護訳：一切衆生性寂靜、未曾有得其根本、若有能觀此法者、我說永寂無有余、菩提流志訳：一切衆生性寂靜、無有得其根本者、若能了知如是法、斯人滅度永無余
部派で、阿羅漢の生前を有余依、死後を無余依と考えるのと異なり、ここでは空性の信解を無余依と考えている。
- 36 竺法護訳：過去諸仏百千万、度諸衆生無有尽、而此衆生無真實、究竟寂靜更不生、菩提流志訳：過去無數百千仏、無有能度衆生者、若此衆生真實有、畢竟無能得涅槃
- 37 Python [1973] p.64 が出す「sred」を「srid」として読む。竺法護訳は「srid」を支持する読み（彼人不著於三界）である。
- 38 竺法護訳：一切諸法皆滅相、未曾能有得生者、若有能觀如是法、彼人不著於三界、菩提流志訳：是即無礙仏菩提、於中究竟無所有、若能了知如是法、我說名為離欲人
- 39 デルゲ版の読みを採用して、「〔これら諸〕偈頌〔、すなわち〕修行を教示するこれ（Tib.thigs su bcad pa bsgrub pa bstan pa 'di）」と理解した。またこの箇所から、空思想が勝義における「思想」のみではなく、世俗における「修行」であり、作用する点が理解できる。
- 40 「len pa（取）」は五取蘊を意味する。この議論は、先行する通し番号「46. 増上慢をもった者への説法」、「47. 声聞乗の増上慢」、「48. 菩薩乗の増上慢」、「49. 増上慢の無い者」、「50-94. 空性をもって律の確定（決択）とする」を踏まえたものである。なお竺法護訳には「二百比丘増上慢者、不受諸法」とある。

- 41 竺法護訳に「壊一切心識」、菩提流支訳に「摧滅心識」とあるのを参考にして、「sems can」を「心識」と訳した。ちなみに J. S. Negi, *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 1993, p.7125a には、サンスクリット辞書『アマラコーシャ』を出典として、「Tib.sems can」の原語が「Skt.cetanah」である例（その他数例有り）、p.7125b には、サンスクリット本『入法界品』を出典として、「Tib.sems can」の原語が「Skt.citta」である例が挙げられている。

【付記】 藤仲孝司氏に数々の御教示を頂戴した。

キーワード：死生観、菩薩戒、増上慢、ウパーリ（優波離）、宝積経
(なかみかどけいきょう、共生文化研究所研究員、知恩院浄土宗学研究所研究員)